

平和景観試論：
広島都市空間の記憶とその継承に関する一考察

千代章一郎
(広島大学大学院工学研究科教授)

1 はじめに

「平和」に関する研究は、理論的にも実践的にも多様に繰り広げられ、多くの成果を生んでいる。にもかかわらず、今日の世界情勢はますます混迷をきたし、食料・エネルギー、民族、宗教、国家などを巡る複雑な形態の争いが止むことはなく、平和な生活環境が実現されているとは感じられない。それはとりもなおさず「平和」を「戦争のないこと」と考える我々日本人の基本認識があるからであるが、しかしまた一方で、地震、台風、津波、あるいは地球規模の環境問題もまた我々の生活環境の脅威となっている。その意味で、「平和」は「戦争のないこと」だけではなく、包括的に「生き延びる場所のあり続けること」とした場合、「平和」を人間と場所を包括する空間・時間論として明らかにすることが重要であると思われる¹⁾。そして核の問題は、「生き延びる場所」に関する究極的な問いである。

生き延びる場所を瞬時にして奪われた被爆都市において、場所に刻まれた人間の記憶もまた、失われてしまったのであろうか。確かに、20世紀の戦争の極である原子爆弾の投下による被爆体験という負の記憶でさえ、その継承は容易ではない。一般的に、時間の経過は生々しい体験の記憶をはじめは教訓に変え、次に単なる史実となり、そして負の記憶を留める場所でさえ観光名所となり、ノスタルジーと化したその場所の意味は最終的には忘却される（リクール、2004-2005）。

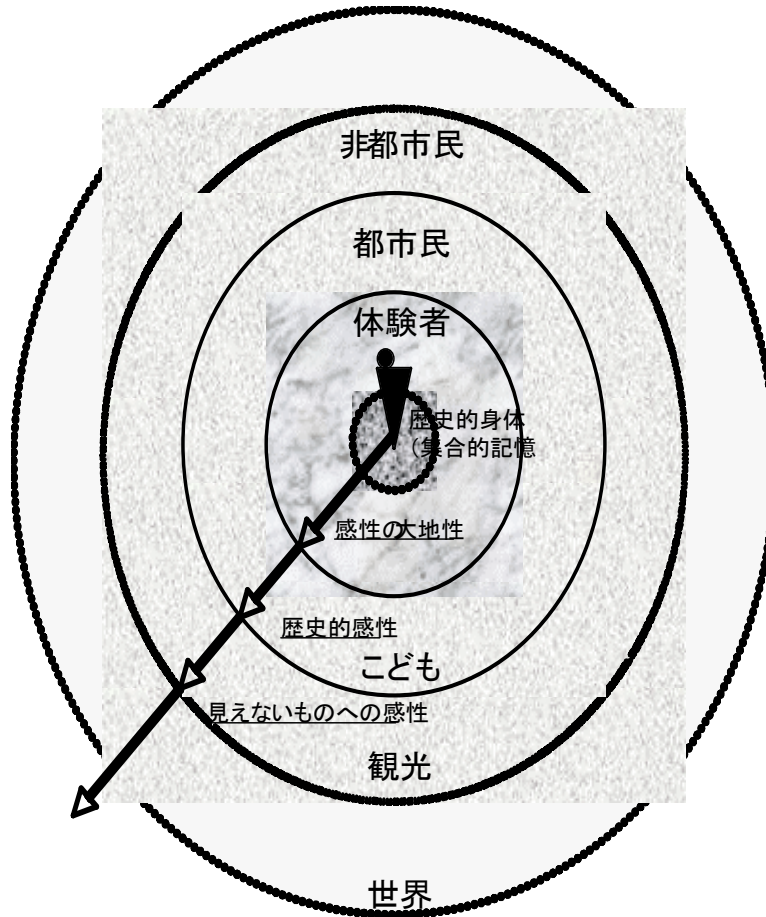
語り継ぐこと、すなわち「語ること」と「聞くこと」という行為的相関の継続性に限界があるように、記憶の証左となる都市景観も変貌を遂げざるを得ない。被爆という負の記憶もまた、その風化が不可避であるにしても、記憶を十

全に引き出して創造的に解釈すると同時に、記憶を継承し、「記録すること」という方法以外に生きられる「平和景観」として不断に形成し続けていくための政治的、学術的、あるいは芸術的な面からの方法的戦略が必要である。

「平和景観」とは、負の遺産の痕跡（物象）でも、原理的に平和ではあり得ない世界（ヴィリリオ、2007）に生きる我々が過去を理想化してつくりあげた単なる都市のイメージ（心象）でもない。現に我々が今ここに生きる環境に平和であると感じる主体（身体）と客体（大地）の総称である。そして「平和景観」が単なる物象ではなく心象に関わる限り、「平和景観」には多かれ少なかれ負の記憶の問題が包含されている。記憶の問題は生理学、心理学、政治学、社会学、哲学など様々な領域で論じられているがⁱⁱ⁾、「被爆」という実体験の内実に迫るためには、被爆者の「記憶」とその「言語表現」を手がかりに解釈者は推論を重ねる以外にない（松尾・谷 2007：11-13）ⁱⁱⁱ⁾。しかしながら、被爆者における「被爆」「記憶」「言語表現」のプロセスは非線型的あるいは双方向的であるとも考えることもできる。例えば、「言語表現」の場面ではじめて暗黙裡の記憶が呼び戻されることも考えられないことではない。その上、解釈者は被爆者の記憶の証言の外部にいるとは必ずしもいえない。被爆体験を継承しようとする証言者の言語表現とその解釈者との信頼関係や社会的背景に表現内容が左右されることもあり得る。本論は、原爆体験の記憶の想起・表現・解釈のモデルを再考し、記憶の継承に関する方法を考察することによって、「平和景観」を生成論的に捉える一つの試みである。

そこで、被爆者の身体を基準に、記憶の継承に関わる「平和景観」の生成モデルを提示したい。広島という大地の主体となる身体としての、被爆者・子ども・ツーリストである（図1）。

図1 記憶と継承のダイナミズム



2 被爆者の記憶^{iv)} : 体験記憶の多様性ならびに感性の大地性の問題

「庇護される空間」(ボルノー、1988)を奪われた被爆者の身体は、どのように都市景観の記憶を蓄積してきたのか、それは暴力によって身体が犯されることのない一般的な過去の想起とどのように異なるのか。しかし、被爆者もまた各々固有の履歴を持つ主体的な人間であり、被爆体験の歴史的な重要性以前に一人の人間として他に代え難い人生を生きる存在であるならば、被爆の意味もそれぞれに異なっているはずである。たとえ被爆体験を語り継ぎたいという意志が明確であったとしても、戦争の教訓のみに還元できない人生の履歴が反映される。被爆者は「ヒバクシャ」である以前に一人の人間である。

したがって、過去の想起には、途切れることのない人生の履歴という時間のフィルター^{v)}がかかっている(千代、2005)。多くの場合、フィルターを通過するものは保持された記憶の断片であり、忘却されたものが再度蘇ることは少ない。確かに、ある事象は「健忘症的」に忘却され(米山、2005)、ある事象は歪曲、誇張される。しかし、被爆という「そのとき」のカタストロフの記憶は、その事象そのものだけではなく、「それまで」と「それから」の人生そのものに関わって再生産され、主体を取り巻く様々な時期の景観の記憶と共鳴していると考えることができる。

被爆体験者の証言については、当時の都市生活の行動範囲からそのほとんどが居住地の周辺地域の記憶に限られる。一方で広島市では、民間の運営する路面電車(広島電鉄株式会社)が主要な都市公共交通機関の一つとして戦前から存続し、当時の運転士・車掌には広島市の都市環境について比較的広範囲に渡る都市空間の記憶が蓄積されていると推測される。戦局の悪化に伴って、徴兵による男子労働者が不足したために、広島市の路面電車の運転士・車掌の多くは学校(広島電鉄家政女学校)に通いながら勤労する女学生たちであった^{vi)}。

筆者は現在所在が明らかな家政女学校出身の生存確認者34名^{vii)}へのアンケートを実施した(2005年11月16日発送)。アンケート調査項目は、表1の通りである。主に戦前の記憶と復興を果たした現在の広島市についてアンケート調査項目を設定し、アンケートという形式上、被爆体験や身体的な後遺症の問題などのデリケートな質問については敢えて差し控えた。すなわち、被爆の事実ではなく、その前後のつながりを主題として、入学以前の生活環境から現在まで質問項目を設定した^{viii)}。

回答者は14名である(2006年2月現在)。その他については電話インタビューを実施し^{ix)}、未回答者から回答を得た(アンケート回答者を含め計19名)。しかしながら、回答拒否者もあった。その理由は、回答意志がありながら、身体的条件(視力の悪化や体力・気力の低下)や家族環境(配偶者の看病など)により回答できなかった場合と、回答意志がないもの(「語りたくない」、「忘れたい」、「思い出したくない」、「忘れてしまった」^{x)})に大別された。被爆体験を語ることにはある程度の時間が必要であるが(関、2003)、それでもなお語り得ないこともある。あるいは語り得ることができたとしても、身体的条件がそ

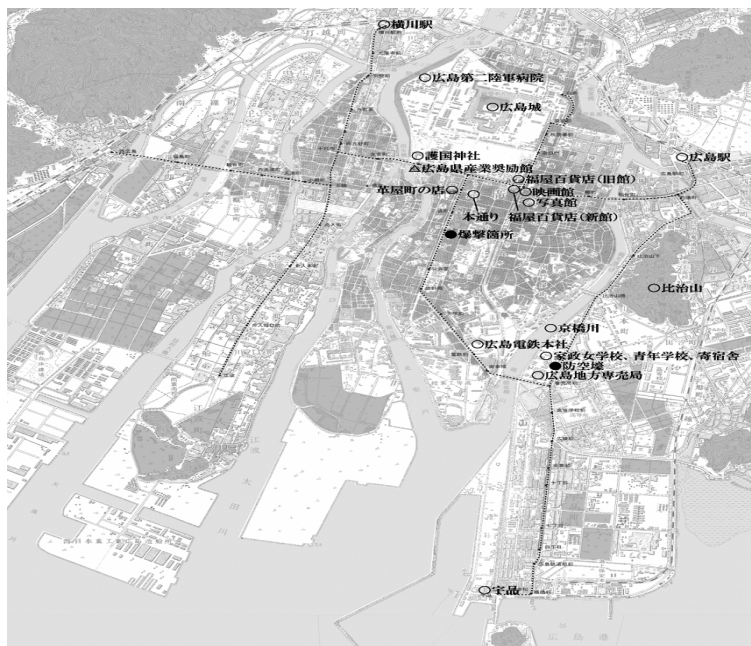
れを許さない場合もある。

回答において、戦前、戦後共に都市の印象は肯定と否定が入り交じっている。一例を図2に示す。

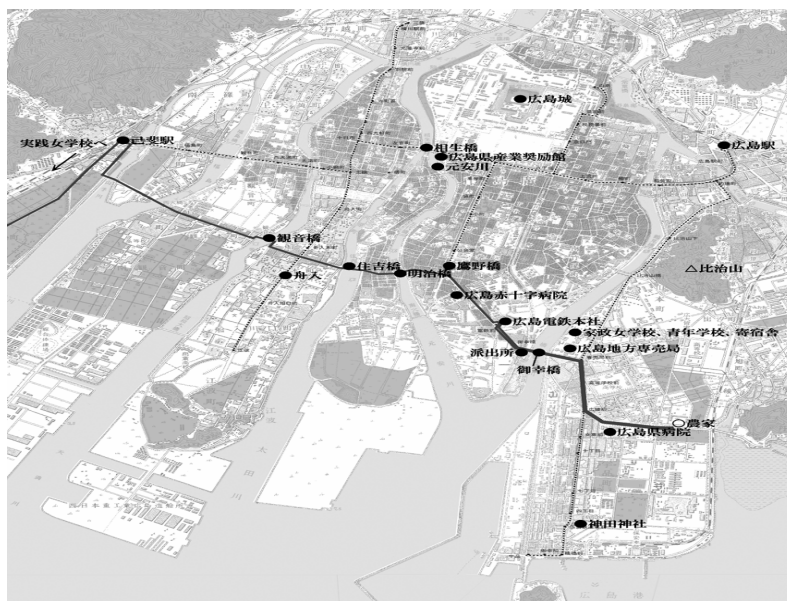
図2 ある回答者の戦前・被爆・戦後の記憶

凡例：広島電鉄路面電車路線 ……、避難経路 ——
正の記憶 ○、負の記憶 ●、正負の記憶 △

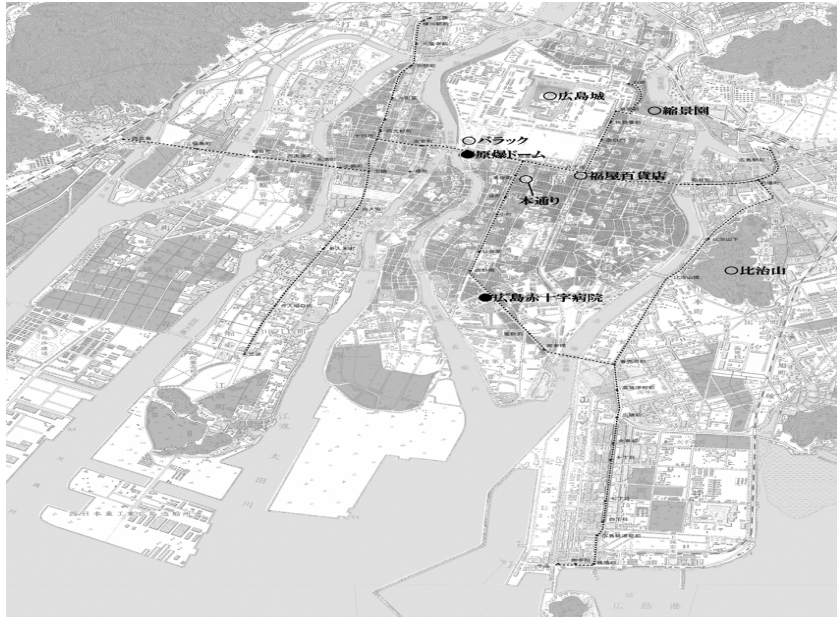
戦前



被爆



戦後



田舎から家政女学校に入学した動機は広島への憧れ、金銭的問題など様々である。快活で楽観的な少女もいれば、都市生活に馴染めず時代の影響のためか陰鬱な少女もいる^{xi)}。被爆以前の広島の印象は、時代性によって規定されつつも、当然のことながら一人の人間の個性を反映している。しかし、いずれにしても、戦争への絶望感と生きることの希望が混在している。むしろ、戦争への絶望感が強ければ強いほど、生きることへの執着が垣間見えるのである^{xii)}。

また、現在の広島市については、回答は基本的に肯定的である。一般的に考えれば、カタストロフを経験した場所へ足を運ぶことは、被爆体験の景観が二重写しになり耐え難いものであると推測される (Heidegger, 1987) (Merleau-Ponty, 1964)。しかしながら、多くの回答者が復興した広島市を肯定的に捉え、またしばしば来広している。おそらくそれは、戦後復興を果たした現在の広島市が平和の証であると同時に、「夢のような広島。立派になった、よくなった。一番好きな広島、一生広島。その思いは年々強くなる。原爆ドームは母のお墓のように思える。遺骨も見つからないので」という回答は、被爆という身体を経験を考える時、その根底に死者の眠る大地の景観に対する特別な感情の表れと考えることもできる。被爆した身体は、今でも（あるいは今になって）都市の大地に対するある種の過剰な反応を示すのである。

被爆体験者である女学生たちの景観の想起は、「身」(市川、2001)を剥ぎ取られるかのような否定的体験によって、証言の事実の正誤を超えて、生と死における大地性の問題(大地において死を生きる身体の問題)^{xiii)}を浮き彫りにしている。それは外傷性の記憶(中井、2004)としてのみでは明らかにできない身体を持続の問題なのである。大地に生きる人間の感性は、視覚情報に還元することはできない。大地は生命の基盤であると同時に死を内包するのであり^{xiv)}、被爆を経験した身体がしばしば「語り部」として立つその理由は、事実の継承のためであると同時に、死者への感性を呼び覚ますこの大地性に誘発され、かつまた大地に起立して天空を目指すいのちの生動ではないかと思われる^{xv)}。

3 子どもの感性^{xvi)}：解釈と継承の多様性ならびに歴史的感性の問題

ところで、被爆者の歴史的身体は同じ場所に住む次世代の子どもたちに受け継がれていく。被爆二世・三世に限らず、広島という大地に育つ子どもたちは直接の体験者ではないために、被爆者の体験とその記憶を身に浸みて感じるためには、所謂「平和学習」が果たす役割は重要である。広島市の小学生は、他県の小学生にもまして密度の濃い平和学習教育を受けている^{xvii)}。また、平和記念資料館を訪れ、被爆者証言を耳にし、親戚縁者に被爆体験者がいる児童にとって、「平和」における非核・反戦(あるいはそれを可能にする国際理解)の主題について十分に教育されている。しかし負の体験の継承が、被爆都市に居住する次世代の子どもたちにとって「学習」以上に記憶の継承のリアリティを持ち得るかどうかは検証しておく必要がある。

筆者は2008年度までに、小学校の総合学習の一環として7年に渡り環境地図制作のフィールドワーク(環境の○×評価)とワークショップ(○×評価のアイコン化)を実施し、児童の環境認識の構造を「アイコン(絵文字)」^{xviii)}を通して考察してきた(千代、2003；千代、2004；千代、2005)。「エコピースマップ」のコンセプトは、とくにエコロジーや歴史的環境に配慮した平和な都市環境実現のための地図制作であり、継続的にそのコンセプトを児童に対して説明してきた^{xix)}。

したがって、環境調査や地図制作の対象となる場所は、すべて「平和」に関連していると言えるが、フィールドワークする広島市の小学生の記述用紙に「平和」あるいは「被爆」という用語が認められるのは、目に見えてそれと分かりやすい被爆した建物あるいはその痕跡が認められる場所である（原爆ドーム、旧日本銀行広島支店、日本赤十字病院、御幸橋、白神社などの施設やモニュメント）（図3）（表2）。

図3 フィールドワークにおける「平和」に関する指摘対象

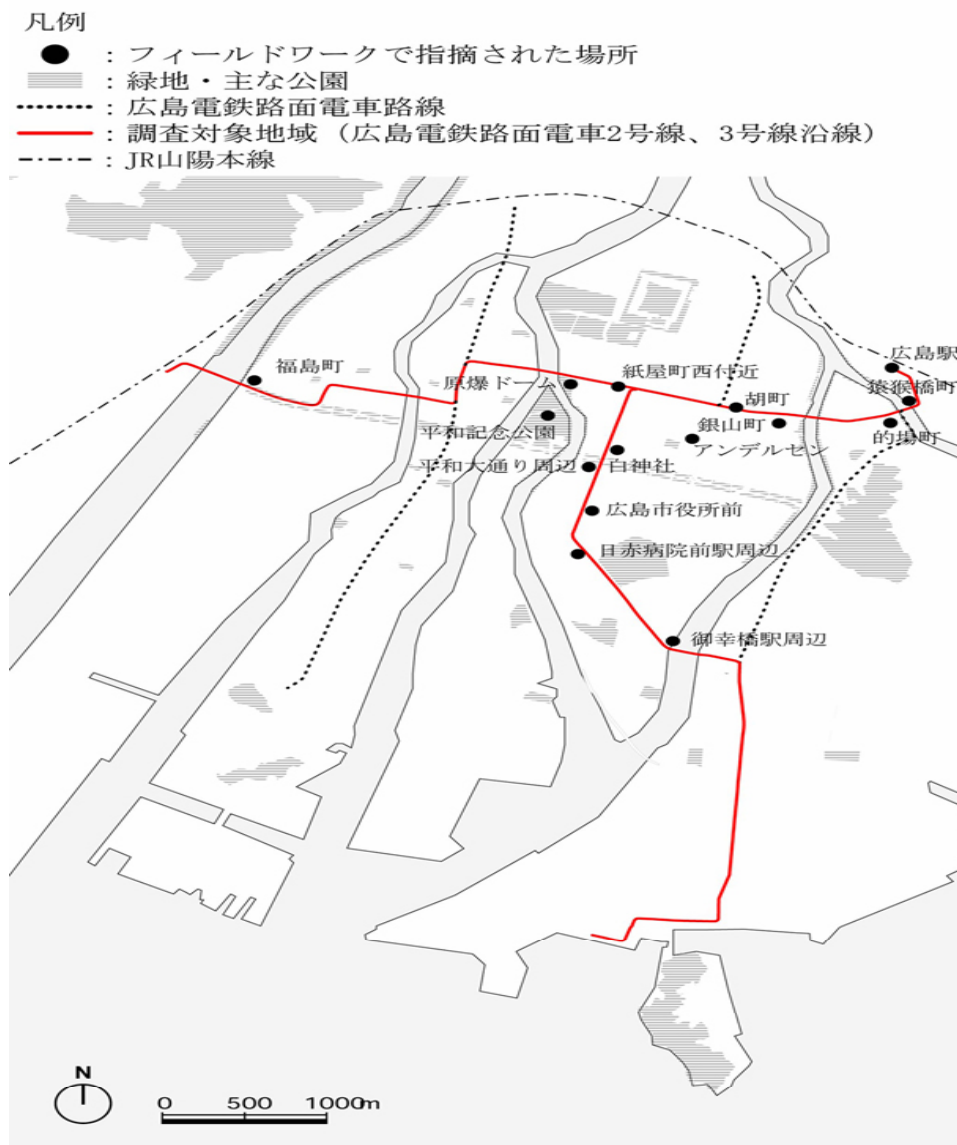


表2 フィールドワークにおける「平和」に関する指摘対象の記述（抜粋）

第1回目（広島駅～西広島駅）			第2回目（紙屋町東駅～広島港駅）		
場所	平和に関する記述	その他の記述	場所	平和に関する記述	その他の記述
広島原爆ドーム	○	広島らしい 原爆ドーム・緑が多い・きれいな 多い でかくてかっこいい 原爆ドームが見えて広島らしい 緑が多くて、人も多くて、少しで しいところ 原爆ドームがきれいだから 原爆ドームが広島らしいから 原爆ドームが広島のシンボル 原爆ドームがあった 原爆ドームが見えて、きれい 広島らしい 原爆ドームがある 広島らしい 世界遺産がある 歴史を感じる 歴史がそのまま残っている 平和を感じる 原爆ドームがあり広島らしいから 広島らしい、市民球場	○	古いけど新しい建物(スロープがある) (←旧日銀)	森林がきれい 花 芸術的 寺社が歴史をかんじる 歴史がいつばいつまっている(白神社) 歴史がある(白神社) きれいなビル 花がきれい 時計がある(NHK) お祭りが楽しそう じんじゃ 木がきれい(気持ちいい)(植物)
	△	原爆ドームがきれいだから 原爆ドームが広島らしいから 原爆ドームが広島のシンボル 原爆ドームがあった 原爆ドームが見えて、きれい 広島らしい 原爆ドームがある 広島らしい 世界遺産がある 歴史を感じる 歴史がそのまま残っている 平和を感じる 原爆ドームがあり広島らしいから 広島らしい、市民球場	△		渋滞気味 でかい きれいなビル(環境に悪そう)
的場町一 稲荷町 周辺	○	平和的(?)	○	たて物のれきしがよくわかる(広島赤十字 原爆病院) 被ばく建物 古くていい	きたない でんていがあぶない でんていがいい (×) 車がすれちがうのがざりざり(×) 自転車があつてあぶない 通行のじゃま 階段が長い(NHK)
	×		×		古いけど歴史を残してきれいな 門がある(東千田公園) 広場らしくない広場でやすらげそう 赤と青の建物がある マンションがきれい ボラの上に草がいつばいつあった 家がれきしを感じる でんきついたらきれいなはず 木が多くてきれい(O) 紙が貼ってない(O) 木がたくさんある 緑のビル きれい 緑がある マンションがきれい 歴史をのこしている。りっぱな木 公園がきれい(東千田公園) 公園がきれい(東千田公園) ビルがきれい ビルがきれい タバコのポイ捨て防ぐためのたばこ てば フリーマ 自然 緑がたくさんある みどりがたくさん かんぱんがあるかい 木がたくさんある公園
第3回目（広島駅～西広島駅）			広島市赤 病院前駅 周辺(広島 東千田 キャンパ ス付近)		
広島駅	○	○	○	○	○
	△	△	△	△	△
猿猴橋町 駅周辺	○	○	○	○	○
的場町付 近	○	○	○	○	○
	×	×	×	×	×
稲荷町一 銀山町付 近	○	○	○	○	○
	×	×	×	×	×
胡町付近	○	○	○	○	○
紙屋町西 付近	○	○	○	○	○
原爆ド ーム周辺	○	○	○	○	○
	×	×	×	×	×
稲荷町付 近	○	○	○	○	○

そして平和環境と見なされる対象は、学年が上がるに連れて、一般的な都市環境を評価する場合とは対照的に一義的となり、近視眼的に「もの」へと収斂していく。フィールドワークする身体は、「平和」に関する限り、場所に密着した感性より場所のコンテキストを離れた概念が勝り、身体を規制していく。フィールドワークを重ねるにつれ、被爆建物の周囲の景観への関心は薄れ、慰霊碑などのオブジェクトなどが「平和」環境として認識される傾向が強くなっていくのである。

しかし一方で、平和環境としての解釈は、時間的・空間的に広がっていく。それは、ワークショップにおける平和環境に関するアイコン表現に顕著である(図4)(表3)。

図4 ワークショップによる地図(1グループの抜粋、部分)

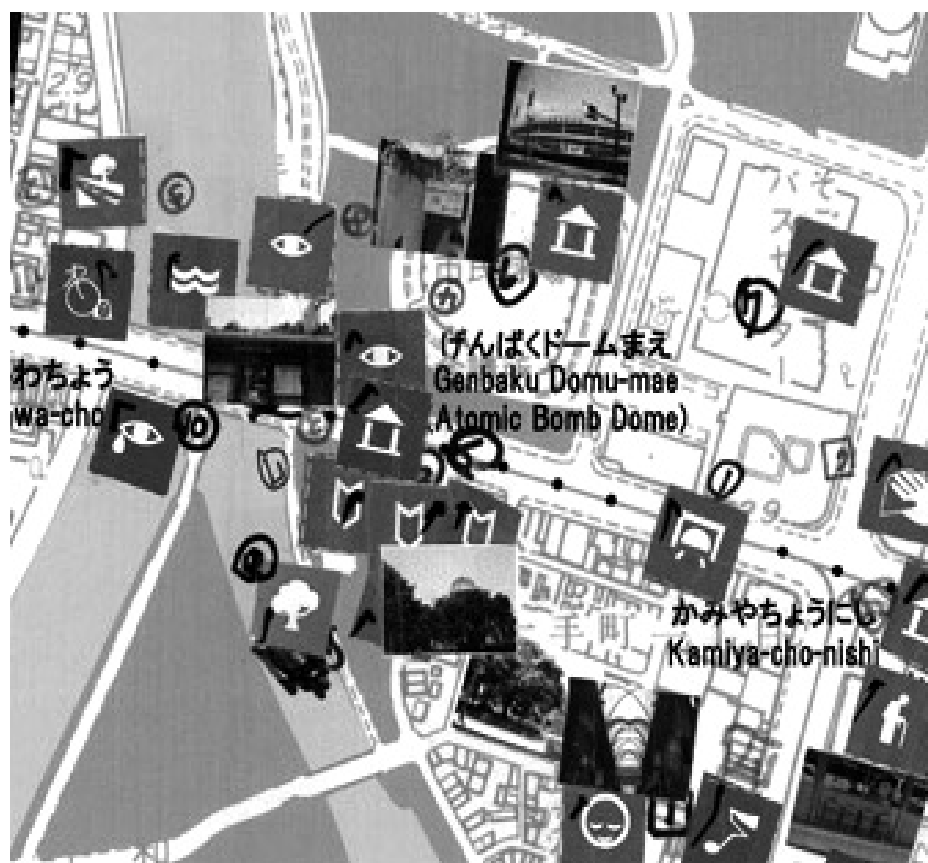


表3 ワークショップにおける指摘対象アイコン

	指摘対象	共通アイコン	記述 (共通アイコンの意味)	オリジナル・アイコン	カスタマイズ・アイコン	カスタマイズの元 共通アイコン	記述 (オリジナル・カスタマイズアイコンの意味)
第1回目	広島駅前広場						ハトがいて平和らしい
	原爆ドーム		広島らしい/原爆ドームが歴史を感じさせる (歴史のつまったところ)				広島らしい
	原爆ドーム周辺		平和を意味するものなどあり広島の平和をいみしている。平和!! (歴史のつまったところ)				平和 (世界につながる場所+たすけあい)
	銀山町電停付近		(被爆建物)				
	アングルセン		(被爆建物)				
第2回目	広島市役所旧庁舎資料展示室						平和な歴史のつまった場所 (歴史のつまった場所)
	広電袋町電停付近		ひばく電車があつた/ひばくした木が残してあつた、それは当時のことを知ってもらふため (歴史のつまったところ)				
	日赤病院		少し歴史があるたても (歴史のつまったところ)				
	広電日赤病院前電停		歴史がかんじられる (まちの文化)				
	広電日赤病院前電停付近		げんばくのあつたこと、こわさがわかるから○、やっぱりげんばくがおちたということだから×、よって○×!!! (まちの文化)				
	広電中電前電停付近		はとが広島らしい (いのちの水)				
	宇品西四丁目付近		ひばくしているたても、れんがでれきしがつまっているので○、だけどかっこう、みためがわるいから× (まちの文化)				
	平和記念公園						平和 (世界につながる場所+たすけあい)
第3回目	広島駅		ハトが広島駅の中において広島らしい (鳥のむれが見えるところ)				
	広島駅付近		ここにも被害があつたことがわかり、歴史を感じる (歴史のつまったところ)				
			このたてもは、古くて戦前からあつて歴史にのこるのいい、でも危険 (歴史のつまったところ)				
			原爆いれいひがあつた (歴史のつまったところ)				
	平和記念公園						地球のみんなに優しく歴史を感じる場所 (世界につながる場所+歴史のつまった場所)
	原爆ドーム		げんばくドームは歴史に殺るたてものでいい!、古くて原爆がおちたことのようにちよう/ひばく建物で広島らしくてよい (まちの文化)				
			原ばくドーム歴史を感じる。 (被爆建物)				
			原爆ドームが広島らしくていい/平和のしようちよう、今は危ない(世の中)/原爆ドームがあつて歴史を感じる/歴史の歩みを感じられる (歴史のつまったところ)				
	原爆ドーム付近		とうが平和の象徴っぽい (まちの文化)				
	相生橋		相生橋が歴史を感じる (被爆建物)				
			歴史の歩みを感じられる (歴史のつまったところ)				
	猿猴川沿い						
			ハトがいて平和 (まちのアート)				

とくに被爆を基点とした歴史的な時間認識がアイコンを通して「平和」と結び付いていく。直接的な「平和」という言葉の記述だけではなく、アイコンによって「被爆」以外の意味が多様に表現されている。それはオリジナル・アイコンよりもむしろ既存のアイコンの適用やカスタマイズという手法が用いられている。とくに、「歴史のつまった場所」「世界につながる場所」のアイコンが「平和」に関して重要な役割を担っている。つまり、自由なアイコン表現よりも、むしろ身体に根ざしたイメージを構造化した「アイコン」という「型」(源、1989) (尼崎、1990) やそれを変形する作業によって、「平和」に関する個性的表現の可能性が開かれている。

地図制作の後、ある6年生児童は、広島らしい平和に関するアンケートの自由記述で「他の人は、戦争がなければ平和と思うかもしれませんが、私は、戦争をしないだけが平和ではないと思います」と回答している。そこに含意されたものは、明快に説明できなくても地図制作上の様々な工夫に現れている。言い換えれば、子どもの平和概念や歴史的感性は、言語表現以外の表現方法によっては、多様に表出するのである。

4 観光の眼差し^{xx)} : 暗示説明とパノラマ景の重要性ならびに見えないものへの感性の問題

次世代の子どもが負の記憶を継承していく一方で、広島平和記念資料館が「ヒロシマを世界に」(1999)と謳っているように、被爆が世界的な価値を持つためには、被爆都市以外の世界の人々に、どのように語りかけ、どのように聞かれるのか、その戦略が鍵となる。語り部の証言(あるいは地元のボランティアガイドの説明)などを聞く機会の少ない多くの観光客にとって、実体的には被爆した人間と寄り添うもう一つの身体、すなわち有形の遺産(被爆建造物やモニュメントなど)が証言者となる。















もちろん、広島にはさまざまな観光形態、限定的には戦後の「平和観光」の形態が存在する。小中学生の修学旅行は最も代表的な平和観光形態であるが、今日では団体旅行のみならず、個人旅行の増加によって、宮島とセットにした

原爆ドームの世界遺産観光も一般化している。そのかなで、昭和 29 年より広島バス株式会社によって始められた定期観光バスは必ずしも主流ではないが、広島市の全体像を紹介する観光形態である。

筆者が独自に収集した定期観光バスのガイドテキスト^{xxi)}や運行系統変更の申請書をもとに復元した 31 通りの運行系統は、これらのバス目的地に対する通過の有無とそれに対応する運行系統の距離によって、三期に大別された。表 4 に観光案内の内容が大きく変わるものを抜粋し、14 通りを掲載する^{xxii) xxiii)}。

表4 運行系統の類型

凡例：運行系統----- 運行系統（推定）-----

第一期：開拓期 昭和29年～49年			
昭和31年7月16日申請		昭和32年8月31日申請	
	<p>下車場所 広島城、平和公園、比治山</p> <p>運行系統の場地的特徴 市街地を北部（広島城周辺）から南部（瀬戸内海沿岸、広島港周辺）へ順次下り、平和公園、比治山を経由しながら通った。</p>		<p>下車場所 広島城、平和公園、比治山</p> <p>運行系統の場地的特徴 経路は前段階と変更はないが、八丁堀、紙屋町、平和大通り周辺の中心部を一巡する部分を含む運行系統とされ、より多く市街地中心部の説明がされた。</p>
昭和34年6月15日申請		昭和37年6月15日申請	
	<p>下車場所 広島城、平和公園、比治山</p> <p>運行系統の場地的特徴 市街地を瀬戸内海沿岸、広島港方向に南下しなくなり、八丁堀、紙屋町、平和大通りといった中心部の観光案内の割合が増した。観光案内により整備された地域、施設を観光案内する運行系統となったと考えられる。</p>		<p>下車場所 広島城、平和公園、広島空港、比治山</p> <p>運行系統の場地的特徴 市街地南西部の瀬戸内海沿岸に広島空港が附設したことにより、ここを下車地点に加え運行系統に変更される。市街地中心部での変更は見られない。</p>
昭和43年2月29日申請		昭和43年5月15日申請	
	<p>下車場所 平和公園、広島空港、比治山</p> <p>運行系統の場地的特徴 広島城での下車は中止されるが、広島空港での下車案内は引き続き行われた。</p>		<p>下車場所 平和公園、比治山</p> <p>運行系統の場地的特徴 広島空港での下車が中止される。そして、市街地南東部の瀬戸内海沿岸の広島港や東洋工業（現在のマツダ）、黄金山をめぐり、国道2号線を通る運行系統とされる。さまざまな分野での工業化を反映した運行系統の設定がされたと考えられる。</p>
第二期：南北期 昭和49年～62年			
昭和49年3月2日申請		昭和50年3月28日申請	
	<p>下車場所 平和公園、比治山</p> <p>運行系統の場地的特徴 北部（広島城、縮景園周辺）から中心部を一巡して、南部（広島港、マツダ周辺の瀬戸内海沿岸）へと通る運行系統となる。前段階に比べ、市街地南東部の部分は省略され、より効率的に南北の移動をとるようになった。</p>		<p>下車場所 平和公園、比治山</p> <p>運行系統の場地的特徴 奥降場所が南口から、新幹線開通に伴って新設整備された広島駅北口（新幹線口）に変更される。広島駅周辺を大きく回る運行系統とされた。他の部分の変更はされない。</p>
昭和60年6月27日申請		昭和62年9月30日申請	
	<p>下車場所 平和公園、比治山、縮景園</p> <p>運行系統の場地的特徴 市街地北部の縮景園を下車場所に一部加える。縮景園を下車場所とし、市街地南部の部分を省略した運行系統と、縮景園を下車場所に加えず、瀬戸内海沿岸まで南下する運行系統の二経路設けられた。市街地中心部の部分も前段階に比べ、一巡せず通過するのみとなった。</p>		<p>下車場所 縮景園、平和公園、比治山</p> <p>運行系統の場地的特徴 瀬戸内海沿岸まで南下するがマツダ付近は経由しない運行系統とする。南部分が距離、観光対象ともにも縮小された。</p>
第三期：中心部収縮期 昭和63年～平成13年			
平成元年5月29日申請		平成10年2月25日申請	
	<p>下車場所 縮景園、平和公園、リパークルーズ、比治山（広島市現代美術館）</p> <p>運行系統の場地的特徴 南部分は省略され、瀬戸内海沿岸に南下することはない。平和公園近くのリパークルーズを含み、異なる観光、観光対象が加わった運行系統となる。</p>		<p>下車場所 縮景園、ひろしま美術館、平和公園</p> <p>運行系統の場地的特徴 運行系統の南端が平和大通りへと北上し、比治山を下車場所とせず、広島城の周辺を経由しない運行系統となる。観光対象の数も大きく減少した。</p>
平成10年8月27日申請		平成12年9月28日申請	
	<p>下車場所 縮景園、平和公園、リパークルーズ、比治山</p> <p>運行系統の場地的特徴 リパークルーズが加わり、再び比治山で下車する運行系統となったが、運行範囲は縮小されたままである。</p>		<p>下車場所 縮景園、ひろしま美術館、平和公園</p> <p>運行系統の場地的特徴 前段階と同様の、市街地中心部のみを簡潔な運行系統に表される。</p>

第一期では、戦後復興以来の広島市観光を定着させるために、市外や県外の伝統的な観光地を含めることで広島市観光を保証し、その一方で広島市内では様々な運行系統が検討され、観光地開発が模索されていく。

第二期では、ツーリストが広島市への往来に新幹線を用いるようになったことで、移動距離を少なくするため東西方向を縮小し、市内を南北に移動する形態を取り、降車場所を減らして、より効率的な観光地巡りが試みられる。

第三期では、新奇性や歴史性のある主要観光地のみを短時間で簡単に回りたいというツーリストの要望^{xxiv)}により、コンパクトな運行系統から外れる観光地は取り上げられなくなり、運行系統は主要観光地の多い市内中心部へ収縮していく。

しかしながら、そのような外的要因があるにせよ、平和記念公園や平和大通り、広島城など戦後復興期に整備された中心市街地の他に、広島空港や広島市現代美術館、東洋工業のような施設が運行系統に取り入れられた時期もあったが定着せず、結果的に定期観光バスによる広島市の観光景観は、市内中心部の限定的な地域で形成されることになった。これは、広島市のアイデンティティが、ある意味では戦後復興期の観光資源に今もなお依存していることを示している。

一方、それらの運行系統で説明される観光案内の内容は、個別の場所の観光（平和記念公園、原爆ドームなど）では戦後復興についての説明が主である。それに対し、パノラマ景では、バスガイドはそれに加えて戦前の景観（瀬戸内海などの地形や歴史的な出来事）についても語る。そのような複合的、重層的な平和を象徴するパノラマ景が得られる場所の典型が、広島市の旧市街地の東端に位置する比治山であった。

これらのことは、地元のバス会社による郷土愛の反映とも考えられるが、単に戦後復興を強調して語るために戦前の歴史が取り上げられたのではない。戦前の広島伝統、戦中のむしろ語りたくはないであろう史実、そして誇るべき戦後復興が定期観光バスにおける語りにおいて繋がれていく。つまり、原爆投下によって破壊された都市広島では、都市環境が急激に変化していく戦後復興期に、おそらく物理的な復興の様子を見に来たであろうツーリストの要望に応えるだけでなく、伝統的な俯瞰景や史実のある場所を通して、歴史的な時間

の連続性を復興し、都市環境全体の時間的・空間的つながりの中で語り手は「平和」を志向し、聞き手の観光景観が形成されていったと考えられるのである。実際、昭和37年のガイドテキストでは、「復興の息吹に燃える広島観光に、ようこそお越し下さいまして、有り難うございます」に始まる定期観光バスは、最後に比治山を經由し、歴史的都市環境全体が俯瞰され、「縄文文化の昔から、現在まで、広島歴史は、種々様々の人生をのせて、一秒一分と年代を重ねています」という文言で締めくくられている。

しかしながら、観光景観におけるそうした歴史的な時間の連続性は、高度成長期以降断絶されていくことになる。俯瞰景が失われ、案内内容についても歴史的な繋がりは限定された一部施設の点景によって語られるのみとなった。比治山からのパノラマ景を失ったことで平和の意味は、戦後復興に限定され平板化したと言わざるを得ない。

一方で、歴史的景観としての瀬戸内海は、眺望が得られなくなった平成3年においてもバスガイドによって語られていた。実際には見えなくても、聞き手であるツーリストに想起させるものは、観光景観の一つである。つまり、戦前の歴史、すなわち伝統との接続はごく近年まで、暗示説明という形式で続けられていたのである。しかし、バスガイドの強い要望にも関わらず^{xxv)}、ルート短縮化が実施され、結果として点景化が引き起こされた。広島市は被爆によって戦前との空間的な断絶が生じたといわれるが、実際に聞き手によって形成される観光景観の歴史的な断絶は、ある意味で高度経済成長に起因する都市の高層化が背景となって進行していったと考えられる。

5 おわりに

筆者の考察の対象に限界があることは言うまでもない。「平和景観」を主題とするとき、例えば識者による平和論やより具体的には原爆ドームの世界遺産化を巡る社会的問題は必ずしも等閑視できない。しかし少なくとも、次元の異なる被爆者、子ども、ツーリストという主体を巡る歴史的考察や、個々人の人生の履歴に遡行するような質的な考察が、記憶の継承に関するダイナミズムと「平

和景観」の生成を理解するために必要であると思われる。

記憶の継承の基点となる被爆者の記憶は、それ自体動態であり、記憶の記録という問題設定のみでは捉えられない。そこには生きる人間そのものの「歴史的感性」^{xxvi)}のあり方が関わっているのである。それは、被爆者、子ども、ツーリストの全てに共通する問題である。負の記憶の記録のみに依存するのであれば、(仮に世界戦争が勃発しないことを前提とした場合)「平和景観」は非日常の虚構を演出するディズニーランド化を避けられないように思われる。

注

ⁱ 「生き延びる場所」は単にサバイバル(生存可能性)の論理ではなく、そのような場所があり続けることによって、人間の生死の履歴が刻み込まれる「聖地」のような場所の謂である。

ⁱⁱ 芸術家における記憶のダイナミズムについては、とくに港(1996)を参照。20世紀の戦争とその記憶については、セルトー(1987)、藤原(2008)を、戦争の記憶の継承については、田中(2008)を参照。

ⁱⁱⁱ 松尾雅嗣・谷整二(2007)「広島原爆投下時の一次避難場所としての橋と川」『広島平和科学』29、1-27頁。

^{iv} 被爆者の記憶に関する詳細な論考については、千代章一郎(2006)を参照されたい。

^v このフィルターは、認知心理学における「スキーマ」と言い換えることができるかもしれない。したがって、貯蔵されている記憶情報の再生(想起)には歪曲や誇張を伴うこともある。

^{vi} 家政女学校の女生徒たちの多くは、広島市外の田舎育ちの女性であった。一般の被爆体験者の記憶との差異は、軍国主義的なイデオロギーの影響が男性とは異なる「女性」という身体と同時に、この点にも求められるであろう(しかしながら生まれ育った環境との関連は本稿では見出せなかった)。いずれにしても、女学生たちにとって、広島市の都市景観は日常に埋没して記録されない自明の景観ではなく、勤務を通して憧れ・羨望・驚きを伴っていたと考えられる。この意味で、女学生たちの原爆投下以前の都市景観の想起は比較的鮮明である。

^{vii} 河野氏の資料提供による。原爆投下直前の家政女学校在校生は309人であり、約一割が被爆死したという(堀川・小笠原、2005)。

^{viii} しかし実際には、「それまで」と「それから」の記述に誘発されて、「そのとき」が想起されずにはおかないことが、アンケートから明らかであった。

^{ix} アンケートという手法を用いたのは、単にインタビュー調査の予備情報収集のためではない。確かに、アンケート調査では記入者の諸条件に応じてばらつきが発生するが、インタビュー形式による調査者の誘導は回避でき、景観想起の特徴の一部が抽出可能と判断し

た。電話によるインタビューにおいてもアンケートと同列に扱うことには注意が必要であるが、調査項目に限定して電話インタビューを実施した。なお、筆者は回答者との共感に基づくインタビュー調査も継続的に進めている。

^x 記憶の想起が最も困難な「忘れてしまった」においても、「語りたくない」「忘れない」「思い出したくない」との境界は、それほど明瞭ではない。

^{xi} 寄宿していた寮についても、「楽しく、お国にお役に立て、自立して、友人も楽しく、一番いい思い出」という回答とは正反対に、別の回答者は「お腹が減っているせいでみんながすぎすぎしていた。田舎育ちが多いのにこんなものかと思った」と回答している。

^{xii} 一般の被爆者証言を統計的に扱った濱谷（2005）においても、カタストロフの体験と人間の生命力との相関を読み取ることができる。

^{xiii} ここで言う「大地」とは、身体と相即した空間を生成させる基盤という意味である。この意味で建築は、大地と天空のあいだに生成する空間の一形式である。

^{xiv} そのような「大地」の自覚は感性・悟性・理性の複合的問題である（今道 1993, p. 101）。

^{xv} 天空と大地の間の建築については、産業奨励館（原爆ドーム）、八丁堀（繁華街）、護国神社、宇品港、名所（縮景園・比治山・宮島）が大半を占める。1915年、外国人建築家ヤン・レツルによって設計された産業奨励館（原爆ドーム）は当時の新名所であり、八丁堀については、広島随一の繁華街になっていたことから、食料や映画などの記憶が多い。護国神社や戦地へ向かうための宇品港については、軍都を反映した景観の記憶であり、名所については休日のささやかな楽しみであった。戦後これらの場所は、1) 被爆後もそのまま保存・再利用されている、2) 被爆後にレプリカが建設されている、3) 被爆後に別の建物が建設されている、4) 被爆後に別の場所にレプリカもしくは類同する建物が建てられている、というカテゴリーに分類される。

^{xvi} 子どもの感性に関する詳細な論考については、千代章一郎（2007）を参照されたい。

^{xvii} 小学校カリキュラムにおいて、高学年化による平和教育の蓄積と同時に、断片化が生じていることも指摘されよう。広島大学附属小学校の『教育課程』（1998）では、総合学習・社会科・生活科で平和学習に重点が置かれているが、メニューは豊富であるにもかかわらず、科目間連携の難しさもあるが、必ずしも体系的な平和教育ではない。

^{xviii} アイコン（icon）とは、画像を意味するギリシア語エイコンeikōnに由来するアイコンに着想を得た言葉である。ピクトグラム（絵文字、pictogram）の一種で、コンピュータのディスプレイ上にプログラムやファイルの種類をシンボル化したものである。米ゼロックス社の「ALTO」（1973）の研究開発に始まるGUI（graphical user interface）環境を備えたオペレーティングシステムは、アイコンを用いることによりユーザーが直感的に分かりやすく操作できるようにしている。アップルコンピュータが1984年に発表したMacOSに初めて採用された。東方正教会で崇敬される板絵の聖画像アイコンが小アジアからエジプトに広まり、のちにバルカン半島やロシアへ波及したように、アイコンはさらに、1995年に発売されたマイクロソフトのWindows 95に採用され、世界中に普及した。筆者が用いているアイコンは、世界300年以上で活動が展開されているNPO組織、Green Map Systemによって環境に良いとされる要素や環境に悪いとされる要素に関する11カテゴリー125個のアイコンであり、地域のローカルな環境をこれらの世界共通のアイコンを用いて表現することで、グローバルなコミュニケーションが主にインターネットを介して行われている。

^{xix} 明文化された環境地図制作のコンセプトは、明快かつ多様な解釈が可能であるように設定している。すなわち、次の通りである。「ひろしまエコピースマップは、「ひろしまをつなぐ」環境地図です。人・地球・自然・歴史を路面電車をつなぎながら、場所に愛着が芽生えるような感性を育み、あたらしい「平和」(エコピース)を表現していきます」。フィールドワークにおいては、そのような「エコピース」な環境は○、そうでない環境を×、どちらとも言えないもしくはどちらとも言える環境を△で評価し、ワークショップでは○×△に対応する緑赤黄アイコンに置き換えて、「エコピース」の内容を表現する。

^{xx} 観光の眼差しに関する詳細な論考については、Sendai and Yokoyama (2005) 及び千代章一郎・横山尚 (2003) を参照されたい。

^{xxi} ガイドテキストとは、運行系統の変更や都市景観の変容、あるいは観光客の要望に応じて、バスガイドらによって(平成11年のものについてはバスガイドの教育者によって)新聞や文献資料を用い、時事に合わせて改訂される。その間隔はおよそ一年である。バスガイドはガイドテキストをもとにガイドを行うが、その内容をそのまま話すのではなく、歴史資料や新聞などからの新しい情報や知識によって個人で異なる演出を加えた内容に改変している。しかし、バスガイドへのヒアリングによれば、ガイドテキストはバスガイドらにとって基礎的な重要性を持つ社外秘の資料として位置づけられている。調査の結果、現存するものは、昭和37年、48年、57年、60年、平成3年、11年発行の6部である。

^{xxii} なお、市外の観光地との組み合わせで複数のコースが設定されることもあるが、市内観光に関しては常に1コースのみの運行である。

^{xxiii} 表中に示す運行系統の復元図には、各申請書の申請年と下車場所、その運行系統の特徴を併記している。また、それぞれ申請年により近い、5万分の1地形図(国土地理院発行)を筆者がトレースしたものを下地とした。申請書の申請年と、用いた地形図の発行年の対応は以下の通りである。(申請書の申請年-地形図の発行年)

昭和31年-昭和25年/昭和32年、34年、37年、43年、49年-昭和45年/昭和50年-昭和48年/昭和60年-昭和59年/昭和62年、平成元年-平成元年/平成10年、12年-平成11年

^{xxiv} 「安く、早く、手軽」広島バス株式会社発行、平成10年2月25日申請、「一般乗合旅客自動車運送事業(定期観光)の一部休止申請書及び事業計画変更(運行時刻・運行系統)認可申請書」より引用。

^{xxv} バスガイド経験者は、インタビューで次のように述べている。「今も私たちはなぜ比治山をカットしたのかっていうのが疑問なんです。それはもう会社の方針ですからどうしようもないですけど、復活させてほしいというのは、あることはあるんですけども、なかなかガイドの意見としては通ってない」(広島バス株式会社所属バスガイド退職者S女史へのインタビュー、2003.10.19実施)。一方、事業者は、時間短縮を理由に見晴らしのきかない比治山を経由することに意味を見出さなくなった(「上がっても見えない展望台じゃあね、展望台じゃないもんですからね」(広島バス株式会社観光部長、事業部長へのインタビュー、2004.1.16実施))。

^{xxvi} 桑子(2001)は、「痕跡から失ったものを探り出す能力」として歴史的感性を定義している。

参考文献

- 尼崎彬 (1990) 『ことばと身体』、勁草書房
- 市川浩、中村雄二郎編 (2001) 『身体論集成』、岩波書店
- 今道友信 (1993) 『自然哲学序説』、講談社
- ヴィリリオ, P.、竹内孝宏訳 (2007) 『パニック都市』、平凡社
- 木村敏 (1994) 『偶然性の精神病理』、岩波書店
- 桑子敏夫 (2001) 『感性の哲学』、日本放送出版協会
- 関礼子 (2003) 『新潟水俣病をめぐる制度・表象・地域』、東信堂
- セルトー, M.、山田登世子訳 (1987) 『日常の実践のポイエティック』、国文社
- 千代章一郎 (2003) 「環境地図の思想- 「グリーンマップ」制作における子どものアイコン表現」『感性哲学 3』、東信堂 : 58-80
- 千代章一郎 (2004) 「歴史的環境に関する子どものアイコン表現」『感性工学研究論文集第 5 巻第 1 号』 : 33-42。
- 千代章一郎 (2005) 「アイコンを用いた歴史的都市環境地図と時空のコミュニケーション」『感性哲学 5』、東信堂 : 36-63
- 千代章一郎 (2006) 「被爆した身体と都市景観の想起」『感性哲学 6』、東信堂 : 61-75
- 千代章一郎 (2007) 「平和環境の多様性と概念化 : 広島市の小学生児童による都市環境表現の変容」『感性哲学 7』、東信堂 : 86-101
- 千代章一郎・横山尚 (2003) 「広島定期観光バスにおける運行系統の変容」『都市計画学会論文集』、No. 38-3 : 685-690
- 田中利幸 (2008) 『空の戦争史』、講談社
- 寺本潔 (1990) 『子ども世界の原風景』、黎明書房
- 中井久夫 (2004) 『徴候・記憶・外傷』、みすず書房
- 西村幸夫 (1997) 『環境保全と景観創造』、鹿島出版会
- 野田正彰 (1988) 『漂白される子供たち』情報センター出版局
- 濱谷正晴 (2005) 『原爆体験』、岩波書店
- 広島市 (1985) 『広島被爆 40 年史 都市の復興』、広島市
- 広島市 (1996a) 『ヒロシマの被爆建物は語る』、広島平和記念資料館
- 広島市 (1999) 『図録 ヒロシマを世界に』、広島平和記念資料館
- 広島電鉄株式会社 (2005) 『電車を走らせた女学生たち 広島電鉄家政女学校の記憶』、広島電鉄株式会社
- 広島電鉄株式会社 (1992) 『広島電鉄開業 80 年創立 50 年史』、広島電鉄株式会社
- 藤原帰一 (2008) 『戦争を記憶する 広島・ホロコーストと現在』、講談社
- 堀川恵子・小笠原信之 (2005) 『チンチン電車と女学生』、日本評論社
- ボルノー, O.・F.、大塚恵一・池川健司・中村浩平訳 (1988) 『人間と空間』、せりか書房
- 松島恵介 (2002) 『記憶の持続 自己の持続』、金子書房
- 港千尋 (1996) 『記憶』、講談社
- 源了圓 (1989) 『型』、創文社

-
- やまだようこ編 (1997) 『現場心理学』、新曜社
- やまだようこ編著 (2000) 『人生を物語る- 生成のライフストーリー』、ミネルヴァ書房
- 米山リサ、小沢弘明・小澤祥子・小田島勝浩訳 (2005) 『広島 記憶のポリティクス』、岩波書店
- リクール, P.、久米博訳 (2004- 2005) 『記憶・歴史・忘却』、新曜社
- Heidegger, M., 1987, *Zollokoner Seminare*, Vittorio Klostermann
- Merleau-Ponty, M., 1964, *Le visible et l' invisible*, Éditions Gallimard
- Sendai, S. and Yokoyama, H., 2005, 'Peace and Panorama in the Landscape of Tourism', *Proceedings of the 3rd Global Summit on Peace through Tourism*, International Institute for Peace through Tourism, pp.168-176